新テストで変わる？ これからの文法指導

萩野俊哉

1　はじめに

文法の学習は英語力の基礎を作り上げる上で不可欠です。したがって，学校で文法を教えることは必要です。しかし，大切なのは文法の「教え方」です。私は，新しい学習指導要領の実施といわゆる「新テスト」（大学入学共通テスト）の導入によって，これからの英文法指導は次のように改善されることを改めて強く期待しています。

2　コミュニケーションのための英文法指導へ

無味乾燥な文法解説や無目的な文法ドリルはもはや終わりを告げ，「何のための文法指導か」が問われる時代へと私たちは入りました。「新テスト」のプレテストを見ても，語句整序などの文法や語法の力を単独で直接測るような問題は姿を消しました。一方，たとえば本文中の仮定法過去完了形の意味を理解していないと解けない問題が出題されるなど，読解の中で文法力が試されるようになりました。リスニングも同様です。

読解やリスニングは，書き手や話し手の伝えたいことを読み取りあるいは聞き取るというコミュニケーション活動です。また，今までどちらかというと軽視されてきたスピーキングやライティングも，今後「新テスト」や日頃の授業の中で重視されるでしょう。つまり，今後は「コミュニケーションのための英文法」指導が求められることになるのです。そして，その指導法の核となるキーワードは以下の３つです。

⑴ meaningfulness

前述のように，文法には必ずその文法が使われる「意味」があります。その点をきちんと生徒に理解させ，習熟させることが必要です。

たとえば，受動態が使われる「意味」には，大きく以下の３つがあるということを理解させる必要があります。

①誰がやったか（行為者）がわからない，あるいは言うことができないか明確にせずぼかしたい

・All the jewelry *was stolen* from the store.
・More than 50 ordinary citizens *were killed* during the attacks.

②情報の自然な流れを作り出し，前の文とのつながりをよりスムーズにしたい

下の例においては，よく知っている John について何が起きたかを伝えたいわけですので，「旧情報→新情報」という自然な流れに沿った形のａ．の文（受動態）が適切です。

I happened to see David on the street. He said to me,

ａ．“Did you hear that John *was bitten* by a dog yesterday ?”
ｂ．“?Did you hear that a dog bit John yesterday?”

③主語を「軽く」したい

次のｃ．の文は，主語が長く，いわば「頭でっかち（top-heavy）」の文です。英語はこのような形を嫌います。d.のように受動態を用いることで,そのような形の使用を避けることができます。

ｃ．The words said by the teacher during his class yesterday influenced me.
ｄ．I *was influenced* by the words said by the

teacher during his class yesterday.

⑵ usefulness

生徒は英語で自分の言いたいことが文法を活用してきちんと相手に伝わったときに文法は「役に立つ」と実感します。この実感を生徒に味合わせてやる指導が求められます。

まず，ひとつ例を示します。to 不定詞と形式主語 it を使ったコミュニケーション活動です。

> 次の事柄はあなたにとって，〈easy, difficult, impossible, boring, interesting〉の内のいずれでしょうか。例にならって，〈It is/was/will be ～ for me（not）to ...〉の形で書きなさい。その後，ペアで会話してみましょう。
>
> （例）to ask for a date : It is easy for me to ask for a date.
>
> a . to play the guitar:
>
> b . to get up early:
>
> c . to speak English:
>
> d . to be an astronaut:
>
> e . to study for three hours at home:
>
> f . to（自分で考えよう！）:

《活動の手順》

1　指示文の中の単語の発音と意味を確認する。その後，（例）の説明，a . ～ e . のそれぞれの表現の意味を確認し，音読して口慣らしをする。

2　それぞれについて，まず各自自分で答える。

3　ペアを組んで，次の例にならって会話する。

A：Is it easy for you to play the guitar?

B：No, it isn't. It is impossible for me to play the guitar. But it is easy for me to get up early. How about you?

4　数組のペアに発表してもらう。その際，教師が適宜質問を加え，さらにコミュニケーションをふくらませることもできる。また，生徒と教師がペアになって発表してもおもしろいだろう。

第 2 に，発想を転換して，従来の「文法解説から言語活動へ」という流れから，それとは逆の「言語活動から文法解説へ」という流れを考えてみても良いと思います。いわゆる task-based な考え方に基づいて，活動（task）の目標を達成するための手段は生徒に自由に選択させ，つまり，使用する文法は生徒にその時点で身についているものを活用させ，活動終了後に振り返りの中で「言いたいけれども言えなかったこと」や「このように言えたらさらに正確に，あるいは効果的，効率的に伝えられたこと」を整理させ，その中で新出文法事項の導入・解説を行うのです。このように行うことで，生徒自身が「文法は役に立つ」ことを実感し，まさに「コミュニケーションのための英文法」を自覚することになります。

第 3 に，ここでは紙幅の関係で詳しく述べられませんが，CEFR（欧州言語共通参照枠）の中で記述されている“Can-do”（言語で何ができるか）の概念と文法を組み合わせてさまざまな言語活動を行うことで，文法の有用性を体感することができるでしょう。

⑶ plentifulness

たくさん（plenty）練習させる，ということです。ときには小学生の『漢字ドリル』や『計算ドリル』のような単純な繰り返し練習も文法の習熟には必要なことだと思います。

また，教材をデザインし直すなど工夫して，らせん階段をぐるぐる回るように，生徒を大切なことに何度も触れさせつつ学習を補強していくスパイラルな学習を促すことも重要です。たとえば，不定詞，分詞，関係詞などを「後置修飾」という概念でデザインし直してスパイラルで教えるというやり方は有効な方法です。

3 おわりに

本稿では，これからの英文法指導を考える上で重要と思われることを 3 つのキーワードを軸にして説明しました。共に頑張りましょう。

（はぎの　しゅんや・新潟県立加茂高等学校長）